

アジア経済ウォッチング

55

ウズベキスタン



ウズベキスタン 豊かな観光資源

國學院大学経済学部教授

高橋

克秀



ウズベキスタンは中央アジアの中心に位置する内陸国で、国土面積は44万8,900平方キロメートルと日本の約1.2倍にあたる。人口は2025年1月時点で約3,754万人と地域最大である。IMFの見通しによれば、ウズベキスタンの実質GDP成長率は25〜26年もおおむね6%前後と高い伸びを維持する一方、インフレ率は25年に9%前後、26年も7%程度と高めの状態が続くと予測されている。

二重内陸国

地理的特徴としてまず挙げられるのが、世界でも数少ない二重内陸国（ダブル・ランドロック）であることだ。海に面していないだけでなく、隣接する国々もすべて内陸国であるため、海上輸送へのアクセスが限定される。このため、鉄道や道路による国際物流網の整備が国家戦略上きわめて重要となっている。一方で、中央アジアの中心に位置することは、周辺諸国を結ぶ交通・経済の結節点としての役割を強

光客が増加し、19年には4万1,000人が訪問した。コロナ後も回復が進み、25年には4万人台に戻ったとみられる。物価は総じて日本より安く、特にタクシー料金の安さは際立つ。ここで重要な役割を果たしているのが、配車アプリ「Yandex Go」だ。

ロシア製配車アプリ

Yandex Goを運営するYandex（ヤンデックス）は、ロシア発の大手IT企業で、しばしばロシアのGoogleと呼ばれる存在だ。検索、地図、メール、クラウド、AI翻訳、EC、広告、音楽配信、配車サービスなど多岐にわたる事業を展開し、特に地図情報や交通データ、AIアルゴリズムに強みを持つ。この技術力を活か

ウズベキスタンの主な世界遺産

名称	登録年	概要
ヒヴァのイチャン・カラ	1990年	城壁に囲まれた旧市街。伝統建築が密集し「生きる博物館」と呼ばれる。
ブハラ歴史地区	1993年	イスラーム都市の構造が良好に残る古都。城塞やミナレットが象徴的。
シャフリサブス歴史地区	2000年	ティムールの出生地。宮殿跡や宗教建築が残る。
サマルカンド－文化交差路	2001年	シルクロードの中心として栄えた都市遺産。ティムール朝建築が集中する。
西ティエンシャン山脈（カザフスタン・キルギス）と共同登録	2016年	生物多様性が高い山岳地帯。自然遺産として保護される。

めており、古代から続く交易国家としての性格を現代にも受け継いでいる。

国土の大部分は乾燥した平原で占められ、西部にはキジルクム砂漠とアラルクム砂漠が広がる。東部に向かうと標高が上がり、フェルガナ盆地や天山山脈の山麓部が現れる。農業は主に灌漑によって支えられ、綿花、小麦、果物などの生産が盛んである。気候は典型的な大陸性気候で、夏は40度を超えるほど暑く乾燥し、冬は氷点下まで冷え込む。降水量は年間を通じて少なく、特に夏季はほとんど雨が降らない。こうした気候条件は農業や都市生活に大きな影響を与えており、水資源管理は国家的な課題となっている。

地政学的にも、ウズベキスタンは重要な位置を占める。古代から東西交易の要衝として栄え、現在も中国、ロシア、南アジア、中東を結ぶ交通・物流の結節点に位置する。まさに「ユーラシアのへそ」と呼ぶにふさわしい場所であり、この地理的優位性は経済・外交の両面で大きな意味を持ち続けている。

同国は1991年8月31日にソビエト連邦

して生まれたYandex Goは、ウズベキスタンの主要都市で圧倒的なシェアを持ち、登録ドライバー数は10万人規模に達する。タクシー内での移動は100〜200円程度と非常に安価で、料金が事前に確定する仕組みは観光客にとって安心感が高い。アプリのインターフェースやドライバーとのやり取りはロシア語が基本であり、都市生活におけるロシア語の実務的優位性を象徴する存在でもある。

ウズベキスタンの言語環境は多層的で、国家語はウズベク語だが、都市部やビジネスの現場ではロシア語が最も通用する。サマルカンドやブハラではタジク語話者も多く、若年層では英語学習が急速に広がっている。特にIT分野では英語とロシア語を併用する人材が増えており、外資系企業やITパークでは英語でのコミュニケーションも一般的になりつつある。

高まる日本語熱

ウズベキスタンでは日本文化への関心が高く、日本語学習者数は中央アジア最大規模とされる。主要大学には日本語学科が設置され、日本語は観光業や国際ビジネスに直結する実用言語として位置づけられている。

日本との関係は独立直後から安定的に発展してきた。25年12月にはミルジヨエフ大統領が訪日し、両国関係を「次世代のための拡大された戦略的パートナーシップ」へ格上げする共同声明に署名した。エネルギー、インフラ、人材育成など多分野での協力が確認され、日本を重要な協力相手として位置づける姿勢が示された。

高橋 克秀（たかはし かつひで）

1982年、早稲田大学政治経済学部卒、日本経済新聞記者となる。大阪経済部で中小・ベンチャー企業・地場産業を取材。日本経済研究センターに出向、景気予測を担当。コーネル大学留学、三和総合研究所主任研究員、神戸大学助教授などを経て現職。北京大学国際政治経済研究センター研究員。早稲田大学アジア研究機構客員研究員。専門はグローバル経済・アジア経済論・景気変動論・経済時系列分析。著書に『アジア経済動態論』（勁草書房）、『グローバル・エコノミー』（東洋経済新報社）、『図説改正外為法』（東洋経済新報社）、共著に『東アジア共同体の構築』（岩波書店）、『アジアのIT革命』（東洋経済新報社）など。論文に「日本のFTA政策の成果と課題」（『貿易と関税』2009年12月、日本関税協会創立60周年記念最優秀論文受賞）など。

から独立し、9月1日を独立記念日としている。独立後は市場経済への移行が進み、特にミルジヨエフ政権以降は為替自由化や国営企業改革、外資誘致など、大規模な改革が加速した。首都タシュケントは人口約311万人を抱える大都市で、66年の大地震後に再建された広い道路や地下鉄など、旧ソ連圏でも屈指の近代的な都市景観を持つ。

きらめくイスラーム建築群

ウズベキスタンの魅力を語るうえで欠かせないのが、サマルカンド、ブハラ、ヒヴァといった歴史都市である。特にサマルカンドは、シルクロードの中心として栄え、ティムール帝国の都として壮麗な建築文化を育んだ。レギスタン広場を囲む3つの神学校、青いタイルが輝くグリー・アミール廟、世界遺産のシャーヒズィンダ廟群など、中央アジア・イスラーム建築の粋を集めた名所が並ぶ。これらは単なる観光地ではなく、ウズベキスタンの歴史的アイデンティティを象徴する文化遺産として高く評価されている。

2018年のビザ免除措置により日本人観

日本企業の進出はまだ20〜30社規模と限定的だが、エネルギー、インフラ、自動車、繊維、ITなど多様な分野で活動が進んでいる。電力不足の解消やインフラの近代化は同国の最重要課題の1つであり、日本の技術やノウハウが求められている。また、若年人口が多くIT教育が進むウズベキスタンは、日本企業のオフショア開発拠点としての可能性も高い。

ロシア語が優勢であることは日本企業にとって一定のハードルとなるが、ロシア語を理解することで旧ソ連圏全体を1つの市場として捉えることができるという利点もある。今後はロシア語対応を部分的に取り入れつつ、英語話者の若年層を積極的に採用することで、観光、教育、IT分野を中心に協力関係がさらに広がっていくだろう。